

鹿児島に「近現代」の研究拠点を整備する意義

鹿児島大学名誉教授 原口泉

新センター設立趣旨と法文学部への大きな期待

このたび鹿児島大学教育研究拠点整備事業として「『鹿児島の近代』教育研究センター」が設置されようとしています。センターは文理融合の全学施設で学内外の研究者が集う研究拠点となることが目指されています。そのイニシアティブを法文学部が取られます。鹿児島大学は鹿児島県にある唯一の総合大学、最高学府です。法文学部は人文社会系総合学部です。明治維新の原動力となった鹿児島の近現代史研究が国内各地で様々な展開を見せている今、さらなる研究発展の原動力となる中心施設が求められています。その機能を発揮できるのは鹿児島大学法文学部だと期待します。鹿児島大学は「かだい」ブランドとして県民に広く親しまれています。

センター設立の目的は次の3点です。①地域が有する近代化遺産・自然遺産等を有効に活用しうる環境整備と多角的・学際的な研究、②自治体や企業等と連携し地域の文化・観光資源を活用する地域マネジメント研究、③地域創生を担う地域マネジメント人材育成を展開し、その成果を地域社会に広く還元する。

②に大学と自治体との連携が謳ってあります。鹿児島の近現代史研究における歴史・美術センター黎明館との連携が重要なことは申すまでもありません。鹿児島県との連携の先例は焼酎発酵学教育研究センターです。これは鹿児島県酒造組合と鹿児島県の寄付講座から発展した全学施設です。初代センター長は企業から移籍された鮫島吉廣教授でしたから文字通り産・官・学連携の成功事例です。そのカリキュラムの「焼酎の歴史と文化」が示すように文理融合の考え方に基づいています。

鹿児島藩きっての秀才・五代友厚

産業革命から宇宙工学フロンティアへ

今年1月22日大阪市立大学で開催された「ラスト市大（いちだい）五代友厚シンポジウム」でZOOM参加の松田忠大法文学部長が新センターの上記の構想を披露されました。大阪市立大学の前身は五代が筆頭発起人だった大阪商業講習所。キャンパスには2016年建立された五代友厚銅像があります。この4月から大阪府立大学と合併して大阪公立大学となります。

五代は天保6年（1835）鹿児島城下生まれ、藩校造士館で儒学を学び、長崎海軍伝習所でオランダ人から西洋海軍学を学びました。鹿児島藩洋学校の開成所から抜擢した森有礼らの藩費留学生をイギリスに引率したのち、明治維新後大阪商法会議所初代会頭として見事に大阪を近代商工業都市に再生しました。五代の学問的基礎は造士館にあります。友厚の曾孫が1999年鹿児島大学で宇宙科学技術の講義を担当された五代富文先生（宇宙開発事

業団副理事長)、H2 ロケット生みの親です。五代友厚と森有礼の両方をテレビ番組で演じられた俳優ディーンフジオカさんのビデオメッセージが大阪市大に送られ、シンポ参加者から喜ばれました。鹿児島県の科学技術研究の基礎は集成館と開成所にあります。開成所は藩校造士館のいわば理工学部でしょう。鹿児島大学理学部の宇宙プログラムは次世代の宇宙科学の人材を育成しています。開成所の教授陣の石河正龍・前島密・中浜万次郎・本間郡兵衛・澤村惣之丞は全員他国人です。

藩校造士館250年の伝統

鹿児島大学では、NPO 法人「鹿児島 造士館講座」による「造士館講座」が毎年開かれています。鹿児島大学が藩校造士館(1773年)の伝統を受け継いでいるからです。藩校造士館から鹿児島高等中学造士館(1888年島津珍彦館長)と第七高等学校造士館(1901年岩崎行親校長)が生まれ、その伝統は鹿児島大学文理学部(法文学部)と鹿児島県立甲南高校に受け継がれました。五味克夫元学部長は鹿児島大学を去られるとき学部長室で七高の官印を取り出され、これは大事なものであると言われました。1990年五味先生(中世史)、2021年梶尾達哉先生(古代史)が定年退職され、いま日本史研究室は金井静香教授(中世史)お一人。幸い教育学部に日隈正守教授(中世史)と佐藤宏之准教授(近世史)がいらっしゃいます。この陣容で鹿児島大学は歴史学教育研究の拠点としての役割を果たされています。最大の成果は多くの卒業生が各界で活躍されていることです。研究機関はもちろんですが、中学・高校教諭によって地域の歴史研究は担われています。私の在職中、東洋史と日本史が同じ演習室、日本文学が隣室でした。縦文字史料を読む仲間はほぼ一体でした。なかでも日本近世史と近世日本文学は同じ草書体古文書史料を研究対象としている親しい仲でした。丹羽謙治教授編集『薩摩藩文化官僚の幕末明治』は大学院生も参加した共同研究の成果です。

中国文学高津孝教授の玉里文庫漢籍や琉球・薩摩藩博物学研究の一端は鹿児島大学附属図書館貴重書公開展で周知の通りです。

玉里文庫と島津久光は明治維新を解く鍵

玉里文庫は島津久光の文庫で、わが国でも数少ない幕末明治の史料群です。「博覧強記」と兄島津斉彬を感心させた久光。久光自身の書き込みや著書「通俗国史」、斉彬から借用中の春藪文庫の洋学関係史料もあります。国宝指定された東京大学史料編纂所蔵の島津家文書と並ぶとも劣らぬ価値があります。

明治維新は島津久光を研究しないと解けないというのが宮地正人東京大学名誉教授(前黎明館顧問)の持論でした。久光研究では故芳即正先生(尚古集成館館長)の業績が光ります。島津家は守護地頭から近世大名に続いた名門大名です。久光の名門としての矜持と公武合体運動から討幕への決断が無ければ革命の如き明治維新は実現しなかったでしょう。また斉彬・久光の側近市来四郎らが島津家・鹿児島藩の歴史史料の編纂を進めたのも久光の命

でした。久光は保守と革新をあわせ持つ「玩古道人」です。

企業博物館「尚古集成館」は鹿児島近現代史研究の本来

島津氏のヘリテージは現代の企業に受け継がれ、2015年には「明治日本の産業革命遺産」として世界文化遺産に登録されました。1987年には企業史料協議会のシンポジウムが鹿児島市で催されました。「鹿児島県近世産業史料の現地調査～尚古集成館・異人館（紡績所技師館）・切子工場・仙巖園」のあと、基調講演「集成館事業とその歴史的意義」がありました。大正12年開館の尚古集成館はわが国で老舗の博物館の一つです。世界遺産登録は松尾千歳尚古集成館館長や島津公保島津興業相談役、多くの関係者の長年の取り組みの賜物です。磯の歴史と文化を生かす会（会長は石神兼文元学長・法文学部長）が発足したのは1989年。その四半世紀後に世界遺産登録が実現しました。集成館はその構成遺産の一つです。尚古集成館はわが国では三井（三井文庫）・三菱（三菱総合研究所）・住友（住友修史室）と肩を並べる企業史料館です。数多くの近現代史料を保管しながら若手の学芸員と研究員が博物館展示と研究紀要を刊行しています。現在、福元啓介研究員を中心に大幅なリニューアルが行われています。

都城島津邸は史料の宝庫～明治政府の修史事業も都城史料を採訪した～

もう一つの南九州の研究拠点が都城島津邸（山下真一館長）です。米澤英昭主幹（志學館大学講師）や学芸員が今年宮崎県の重要文化財に一括指定された都城島津家史料を翻刻刊行しています。『都城島津家役所日記』は2011年から連年、『伝来史料目録』は2010年刊行。文化財の一括指定とは文書・記録史料だけでなく武具甲冑・家具などの道具類を含めて一括指定するものです。屋敷を含む場合もあります。事例としては沖縄県那覇市所蔵の琉球国王尚家関係資料1292点が一括して国宝・重要文化財に指定されました。尚家は尚円王（1470年即位）から尚泰王まで400余年にわたって王国を統治した家です（第二尚氏時代）。都城は北郷氏（都城島津氏）が初代資忠拝領（1351年）以来、廃藩置県（1871年）まで一円支配してきました。500年以上の史料が伝来しています。従って一括指定すること自体に歴史的意義があるのです。

島津氏・鹿児島藩研究に県境はありません。近世鹿児島藩72万石の領域は、琉球王国を含んでおり、本州の長さほどあります。同邸（都城島津伝承館）が1500年の琉球国王あての朝鮮国王書（2015年国の重要文化財指定）や琉球諸島絵図（江戸中期）を所蔵しているのは、領主の北郷氏（都城島津氏）が琉球攻略を担っただけでなく鹿児島藩の中で大名並みの4万石を領する私領主だったからです。鹿児島藩の行政史料が1872年大山綱良県令によって焼毀されただけに都城島津家史料群は島津家列朝制度（藩法集）など本藩を凌ぐ質と量を有しています。

今、文科省の科学研究を東京大学史料編纂所と連携して進めています。都城島津邸が所蔵する歴史史料（古文書・古記録・絵図など）の画像を、東京大学史料編纂所のデジタルアー

カイズを通して、広く WEB 公開しています。東京大学史料編纂所が本格的に自治体との連携により史料群の画像を Web 公開するのは初めてのことなのです。具体的には、史料編纂所データベースのうちの、「Hi-Cat Plus」というデジタルアーカイブズを通して、史料画像の検索・閲覧が可能となっています。現在見ることができるのは、2017年度から2020年度までに撮影された約11,000コマの画像です。

また文化庁の指導を仰ぎながら高城の後藤家文書目録を刊行、宮崎県文化財に指定され、次は国の重要文化財指定を目指しています。

黎明館・鹿児島県立図書館の史料刊行

鹿児島県歴史資料センター黎明館（現在鹿児島県歴史・美術センター黎明館）は明治百年（昭和43年）記念事業として計画され、1983年開館しました。今や国民的財産となった『鹿児島県史料』の刊行（調査史料室栗林文夫室長）は令和3年度までに104冊の金字塔を築きました。現在黎明館で刊行中の「神社調」が霧島神宮本殿・幣殿・拝殿の国宝指定、鹿児島神宮本殿・拝殿などの国の重要文化財指定に役立っています。「神社調」の解題執筆は丹羽謙治先生。

「市来四郎史料」は「鹿児島の近代」研究に不可欠です。2008年放送の大河ドラマ「篤姫」時代考証は林匡調査史料室長の調査があったからこそできました。鹿児島県がたびたびドラマに取り上げられるのは鹿児島県史料があるからだと思います。『翔ぶが如く』を書かれた司馬遼太郎さんは「一地方の歴史が日本史そのものになるというのは学問の力であり、政治や運動の力でも何でもない」と言っておられました。鹿児島県史料が我が国の歴史研究の発展に資する基盤と評価されていることはもとより、県民の史料への愛着を育てるためにこの事業がさらに充実していくことが国の内外から期待されています。鹿児島県は近代日本の黎明を告げた県だけにこの事業は不可欠かつ恒久的でなければなりません。

鹿児島県立図書館（1902年～）は多くの藩政時代からの貴重資料を『鹿児島県史料集』として1959年以来刊行し続けています（議長安藤保鹿児島大学・九州大学名誉教授）。令和2年度の第60集『通昭録』8は三木靖鹿児島国際大学短期大学部名誉教授・佐藤宏之教授・林匡穎娃高校長（元黎明館学芸課長）執筆。昭和34年度の『薩藩政要録』は故桃園恵真鹿大名誉教授（近世史）・五味克夫先生執筆。

鹿児島県文化財保護審議会の専門委員には金井静香教授ほか多くの鹿児島大学の先生がメンバーです。1883年創立の興業館は貴重な洋式石造建造物です（1998年登録有形文化財指定）。その保存活用のための鹿児島県立考古資料館保存活用計画策定委員会では木方十根大学院理工学研究科教授が委員です。様々な分野の課題解決は文理融合で進められています。

環太平洋の研究拠点としての奄美市

県立奄美図書館では島尾敏雄分館長以来、本土復帰史料などを刊行してきました。奄美市

立博物館には2005年、「童虎山房」(故原口虎雄鹿大名誉教授の鹿児島藩史料謄写本が中心の文庫、約2万点)が寄贈されています。奄美はもちろん鹿児島藩の史料が国内外の研究者の利用に供されています。現在奄美市は環太平洋の一環として重要な研究拠点に発展しました。ハワイ大学のイーストウェストセンター(東西センター。ケネディ大統領により1960年創設)には鹿児島藩と琉球王国の史料も収集されています。ハワイ大学は州立大学ですが、東西センターは連邦政府の予算でアジア太平洋諸国相互理解のために設けられた研究教育機関です。同窓会には世界各地の5万人余りが登録され、2014年沖縄県で同窓会が開催されました。もともと米国の州立大学は地域貢献のために州予算で設立されました。1965年私が卒業したネブラスカ州立大学付属高校は大学キャンパス内にあり、構内にたくさんの高齢者を見かけました。大学は地域の生涯学習の拠点だったからです。

2004年鹿児島大学大学院人文社会科学研究科奄美サテライト教室集中講義には一般市民だけでなく名瀬市職員・名瀬中学校教諭・大島支庁職員が受講されました。現在鹿児島大学国際島嶼教育研究センターの奄美分室(2015年設置)が奄美群島研究の大きな役割を担っています。今月3日には「日本列島南西縁地域の人類史的研究」と題して琉球大学の山極海嗣専任講師の講演がZOOMでありました。従来鹿大には南方科学研究史料センター・南西地域研究資料センター・南太平洋海域研究センターがありました。

鹿児島大学北米教育研究センター(2014年設立)はSFサンノゼでベイエリアの日本各大学連携の中心的役割を担っています。前身のシリコンバレーオフィスでは2008年日米未来フォーラム「篤姫」・2009年「島津斉彬」・2010年「咸臨丸」・2010年「西南戦争」を開催しました。会場はスタンフォード大学やサンノゼ州立大学です。かつてアメリカの国務大臣が東郷平八郎の生まれた加治屋町を訪れたとき「Hero's Town」と感嘆の言葉を発しています。明治維新とアドミラル東郷とラストサムライ西郷隆盛を知らない外国人は少ないでしょう。西郷は「日本のガリバルディ」、小松帯刀は「日本のカブール首相」と言われます。ともにイタリア独立革命の英雄です。孫文と共に中国辛亥革命を成功させた黄興は「中国の西郷」と言われています。黄興は革命の2年前に南洲墓地の西郷隆盛の墓参りをしています。この鹿児島の先人たちは鹿児島の歴史遺産です。つぎのNHK大河ドラマに島津義弘の登場を期待しましょう。

生涯教育の先駆・琉球大学

1972年沖縄県が本土復帰して琉球政府立琉球大学が国立琉球大学になりましたが、大きく後退したことがあります。当時日本の国立大学では生涯学習という地域貢献が重視されていなかったことです。約100校あった国立大学のなかでシニア短期留学制度をいち早く始めたのが琉球大学でした。2016年には「シニア短期留学～健康長寿に触れる旅」を実施。鹿児島大学生涯学習教育研究センターでは2007年・2008年実施しました。地域の歴史・自然・文化・食などを学ぶ多彩なプログラムで、史跡巡検や学外実習エクスカッションが含まれています。2007年には藤枝繁水産学部准教授の「海への漂流物」に関心が集まり、練習

船「南星丸」や高隈演習林・植物園（1909年鹿児島高等農林学校附属）・博物館・入来電波望遠鏡などが人気でした。環境教育学の小栗有子准教授が担当されました。

研究は市民と共に〜かごしま探検の会が鹿大に誕生

特定非営利活動法人まちづくり地域フォーラム・かごしま探検の会が2001年鹿児島大学に誕生しました。歴史・地理・自然を学び、まちづくりを考えるNPO法人です。初代代表理事深見聡氏（現長崎大学環境科学系准教授）、現在の代表は東川隆太郎氏・事務長東川美和氏、この3人とも鹿児島大学の学生・院生でした。鹿児島の面白さ・価値を多くの人に知ってもらいたいと願う隆太郎さんは『鹿大ジャーナル』182号に「まち歩きの吟遊詩人」と自称しています。世間ではもっぱら「まち歩きの名人」といいます。探検の会は理学部地学科と人文社会科学研究科文化人類学科、教育学部地理学教室とのコラボ、学際融合でした。

高度成長期以来、日本の観光政策はアウトバウンド一辺倒でしたが、今やインバウンドの時代です。国内の地域を学び、まちづくりを進める新しい動向が鹿大から生まれたのです。探検の会はまさに魁（さきがけ）でした。2008年放送NHK大河ドラマ「篤姫」ブームで鹿児島県内各地に観光ボランティアガイド団体が誕生し地域の歴史に関する関心が高まりました。NPO法人鹿児島案内人（吉富キヨ子理事長）・同鹿児島新発見伝塾（今井俊子理事長）・指宿篤姫ボランティアガイド吉留紀代子さん・鹿児島ぶらりまち歩きガイド（谷山由利子さんなど180人在籍）などの活動が活発です。インバウンド事業のかごしま検定が始まったのは2005年でした。当時ご当地検定は全国に生まれましたが「かごしま検定」は現在も続き、公式テキストブックは2015年増補改定版が出されるロングセラーです。初版は5年余で19,800部売り上げました。鹿児島商工会議所が主催し、鹿児島県教育委員会と共催で小学生に「かごしまジュニア検定」が行われて児童生徒の郷土学習に役立っていることも他地域に無い特徴です（2010～12年、9084名の小学生が合格）。最高クラスのグランドマスター合格者今井俊子・横山真由美さんたちは『グランドマスター100の提言』を刊行されました。市民による鹿児島プラットフォーム型のNPO活動です。

鹿大法文学部編『大学的鹿児島ガイド〜こだわりの歩き方』（2018年）藤内哲也・渡辺芳郎・金井静香・細川道久各教授オールスターの分担執筆を新しい試みと感じた私は帯に「明治維新150年と『西郷どん』で注目されている鹿児島の歴史と文化を最新の研究成果に基づいて、第一線の研究者が平易に叙述した本書は鹿児島学の道標となるでしょう」と書かせていただきました。

歴史研究とSDG's

歴史研究には昔の古文書が欠かせませんが、特に近現代の歴史資料の破棄散逸が著しいでした。明治初年の廃仏棄釈がその例です。「御一新」の掛け声のもと徹底的に旧物が破壊されました。同じ時期に「古器旧物保存方」太政官布告（1871年）が出されるほど廃仏捨

積が激しかったこととヒステリックな民衆によって行われたことが分かります。藩費留学生を率いた町田久成は古器旧物の保存に努め、上野の国立博物館を作り初代館長になりました。現在鹿児島県に公文書館が無いことは深刻な問題です。

今は誰しも地球の環境破壊が進み、資源にも限界があることを認識していますから、SDG's（持続可能な開発目標）が人類共通の目標になっています。昔を振り返って未来を見ようとする歴史学はもともと持続可能な開発をめざす学問だと思います。

さて貴方の家のファミリーヒストリーは作れますか？ご家族の写真は残っていますか？PCに保存されていますか？お墓や家系図は？断捨離されていませんか。昨年11月にNHKファミリーヒストリーでタレントの薬丸裕英さん（父方が大崎町、母方が下甕島）が出演されました。寺田剛ディレクターが嘆いておられました。「貴重なお写真を処分してしまっている方々にたくさん出会います。実は薬丸家もそうでした。裕英さんの祖父・正徳氏はカメラが趣味で沢山の写真を残していたそうです。ところが数年前にほとんど処分してしまったそうです。『まさかファミリーヒストリーの取材が来るなんて！』ずっと後悔されていました。明治・大正以前の史跡や資料は当然のこと、昭和の古い家族写真にも、資料的価値があります。背景に写っている看板1枚が、ファクトとしての歴史になるからです。ありのままを映す分だけ、写真はなによりも強いファクトです。高齢社会、核家族化、都市集中、要因は様々ありますが、どうか皆さんには家々に残る貴重なお写真を処分してしまわないようにお願いします。」

体験に基づく傾聴すべきコメントです。鹿児島は写真発祥の地ですが、写真記念館があっていいと思います。文書・文献史料だけでなく画像・映像・写真・音源などのアーカイブズの保存、活用の必要性があります。県立図書館では公益財団法人海音寺潮五郎記念館からの寄付金で少しずつ貴重史料のデジタルアーカイブズ化を進めています。古い新聞フィルムの劣化が進んでいますのでデジタル化が喫緊の課題となっています。海音寺先生の東京世田谷区の旧宅は鹿児島大学に寄贈され、鹿児島大学の東京での活動拠点として活用されています。

近年の朗報は鹿児島大学司法政策教育研究センターが「明治期官僚・官職データベース」の提供を始めたことです。このD・Bは近代日本官僚史研究者の國岡啓子氏が編集・作成されました。慶応4年から明治44年までの奏任官以上の人物が検索できます。今日は米田憲市教授が事例報告されます。

研究連携の時代

鹿児島の近現代史研究進展のための課題はたくさんあります。しかし民間では隼人文化研究会（永山修一会長、ラサール高校歴史教諭）や鹿児島地域史研究会、鹿児島県高等学校歴史部会など高校の先生方の研究活動が活発です。鹿児島県では明治維新150年記念の事業として全国の若手近代史研究者を3年間助成しました。非常に多くの応募があったことを頼もしく思いました。

玉里文庫・東大史料編纂所島津家文書・尚古集成館史料・都城島津邸史料・黎明館史料は鹿児島近代史研究の5兄弟、国宝級の五天王でしょう。これらの研究機関が科研の共同研究を始めました。沖縄県那覇市歴史博物館（外間政明学芸員）とも連携が必要です。様々な研究の強力な推進力になられることを新センターに期待します。